様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　3 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2012
課題番号：20520703
研究課題名（和文）　スールー海域世界を中心とする特殊海産物の移動と越境に関する歴史人類学的研究
研究課題名（英文）　Historical Anthropological Study on Flow of Maritime Products in Sulu
研究代表者
床呂　郁哉（TOKORO　IKUYA）東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：90272476

研究成果の概要（和文）：スールー海域世界と東・東南アジアなど周辺地域間での真珠などを中心とする特殊海産物の生産、流通、利用状況の変遷や背景等について、「もの」の人類学という観点から調査研究を実施した。その結果として 18 世紀から 19 世紀にかけて当時のスールー王国を中心とする真珠やナマコ、鱶鰭などが東アジアを含む各地に輸出されていった時代の歴史的背景に関する知見が得られたほか、20 世紀以降において、真珠養殖技術の進展にともない、スールー産の母貝などが各地の養殖の過程で利用されていった状況などを明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I have conducted general trend and the background of production and consumption of special marine products in Sulu maritime world and its relating areas. As a result of this research, the researcher could clarify the historical background concerning maritime products trading in Sulu kingdom during 18th to 19th centuries.　The researcher also clarified the situation concerning process of utilization in of mother of pearl shell in relating areas originated form Sulu.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：文化人類学・民俗学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：スールー海域世界、東南アジア、文化人類学、もの

１．研究開始当初の背景

本研究は、近年の人類学における歴史人類学的研究、および「もの」（物質文化）に関する

人類学的研究の進展を背景に、フィリピン南部のスールー諸島およびその周辺地域（以下「スールー海域世界」と記す）における特殊海産物の生産、流通・移動と利用に関する調査研究を企図したものであった。

スールー海域世界に関するそれまでの文化人類学的研究の大半は、これまでそこで生活する各民族集団、すなわちタウスグ、サマ、ヤカンなど各民族集団単位でのモノグラフ的研究が主流を占めており、そこにおいていわゆる特殊海産物（ナマコ、フカヒレ、真珠、真珠母貝、燕の巣など）の生産（採取）とその国境を越える移動や越境、流通と消費に焦点を当てた研究は相対的に等閑視されてきたと言って過言ではない。従来の研究ではスールー海域世界からインドネシア各地を含む広義のマレー世界、さらには東アジアやオセアニアの一部にまで至る広域に渡る特殊海産物の移動と越境活動に関しては必ずしも十分な調査研究が実施されてはこなかった。

２．研究の目的

本研究計画では近年の文化人類学における「もの」研究の新たな展開と関心を共有しながら、またスールー海域世界に関するこれまでの申請者（床呂）の研究を発展させ継承しながら、特にスールーを中心とした「もの」（特殊海産物）のアジア各地や域外等への移動と越境に焦点を当てて追跡し調査研究を実施していくことを目的として計画された。

３．研究の方法

フィリピン南部スールー諸島ないしその周辺地域（生産地、流通・利用地域）における実地調査（フィールドワーク）実施し、現地における真珠や真珠母貝、干しナマコ、鱶鰭、その他の採取、加工、利用、流通そして社会・文化・歴史的背景に関する資料や情報を手始めに収集し分析することを主な手法とするものである。

４．研究成果

調査を通じて得られた資料からは、スールー海域世界に関する歴史的背景や、その後の展開に関して以下のような歴史人類学的な知見を得ることができた。まずスールー海域世界は既に既に 13 世紀頃には、華人商人がスールー諸島のホロ島を訪問して真珠をはじめとする海産物や、蜜や森林物産などを買い付け、それらの物品を中国へ輸出していったことが知られている。その対価として、中国からスールーへは黄金、銀、陶磁器、木綿製品などがもたらされた。

とくに西暦 18 世紀から 19 世紀にかけては、ホロ島を中心とするスールー王国はアジアにおける海産物交易の一大交易拠点のひとつであったと言える。スールー王国からの輸出品としては真珠母貝が量的にはもっとも多く、また重要であった。そしてナマコや真珠・真珠母貝などの海産物の多くは、サマ語系の海洋民（サマ、バジャウ）が主な供給者であった。当時、東南アジアでの真珠の最大の産地の 1 つが、スールーであった。スールーの真珠は、マラッカなどを中継点として遠く中東や西欧にまで輸出され、ロンドンでは「マニラ産」の真珠貝として売られていった。なお 17 世紀にミンダナオに滞在していたスペイン人司教の F. コンベスによると、オランダ人がホロ島を「真珠の島」と呼ぶほどスールーの真珠は有名であった。そしてボルネオ沿岸産のものを含むスールーの真珠は、マラッカを経由して最終的にはインドや中東にまで輸出されていた。16 世紀以降にフィリピン諸島の北部を植民地化していたスペインは、19 世紀後半に至るまで、再三に渡ってホロを征服する企てを試みては失敗していたが、このスペインによるスールー諸島への遠

征の動機の１つにも真珠があったことが推測される。また歴史的資料の分析からは、スール一王国が交易中心として台頭してくるにあたっては、イギリス、アメリカ、ドイツなどの外部勢力との関係が大きな要素となったことが判明した。とくに 1773 年から 1775 年にかけて、ボルネオ島沖のバランバンガン（Balambangan）島に設けられた英国商館を通じて、大量の銃砲、弾薬とアヘンがスール一諸島にもたらされた。

これ以降、西欧からの武器弾薬やアヘンは、主要貿易港のあるホロ島を支配するタウスグ人のスルタン（王）と、ダトゥ（Datu）と称される現地貴族が独占する戦略物資となり、このことがタウスグの政治・軍事的優位の源泉となった。武器の見返りに、ホロ島からは真珠の他に干しナマコやフカヒレなどの海産物や樹脂などの森林物産が西欧側の交易船に積み込まれ、中国へと輸出されていった。

ちなみに日本で真珠と言えば一般的にはアコヤガイを母貝とする真珠（アコヤ真珠）が有名だが、現地調査などの結果、スール一諸島で採れる真珠は、白蝶貝（*Pinctada maxima*）や黒蝶貝（*Pinctada Margaritifera*）などを母貝とする真珠、いわゆる南洋真珠が中心であることが確認できた。とくにスール一産の白蝶貝を母貝とする真珠は、金色や銀色を帯びた美しい光沢を有したものとして珍重されており、現在でもスール一海域世界で養殖の対象となり、更にはマニラなどを経由して、日本や香港、中東などを含む海外各地にも輸出されていることが確認できた。また白蝶貝の母貝の貝殻自体も美しい光沢を帯びており、ときには直径 40cm 前後にまで生育するその真珠母貝の貝殻も、伝統的に各種の装飾品や貝ボタンの材料などとして利用されており、現在でもフィリピン各地で工芸品の材料などに利用されている他、輸出用にも利用されていることも確認できた。

こうした真珠や真珠母貝は、サマ人などと呼ばれるスール一諸島の海の民によって主に採取され供給されてきた。彼らは伝統的には素潜りで、ときには水深 10m 以上の海底に潜ってナマコや真珠貝などを採取する潜水漁の達人として知られる存在であるが、この海の民の活躍によりスール一諸島は、東南アジアでも指折りの真珠の産地の１つに成長した。現地調査からは、現在ではスール一海域世界における天然真珠自体の採取は非常に稀になっているものの、真珠以外の海産物、とくにナマコやフカヒレなどの採取は現在でも盛んに実施されていることが調査を通じて確認できた。ただしサマ人らスール一海域世界における生活様式や生業を含む近年の経済的、社会的変化は非常に急激で大きいものである点も調査を通じて確認できた。たとえば、かつてサマ人（とくにサマ・ディラウト）の間で家船での漂海生活が営まれていた 20 世紀前半までの時期には、サマ・ディラウト人の生業はほぼ漁業に限られていた。しかしその後、20 世紀中盤以降に陸に家を建てて住むようになってからは、仲買人などの小規模商業やアガルアガル（*agar agar*）と呼ばれる海藻の養殖、さらにはセンポルナやもっと遠い町で賃金労働や公務員などの職に従事する者も出るようになった。

このうちアガルアガルと呼ばれる海藻の養殖は、スール一諸島南部では主に 1970 年代後半頃に導入され、盛んになったものである。そして現地での聞き取り調査などを通じて、1990 年代前半にも多くのサマ人やタウスグ人が、それまでの漁撈などの活動に代わり、ないしそれらの生業と並行して、換金性・商品性の高いアガルアガルの養殖に従事するようになっていったという傾向を確認

できた。さらに 2000 年代に入ると、それまでフィリピン側に比して相対的には顕著ではなかったマレーシア・サバ州東海岸でもとくにセンポルナ周辺などで従来の伝統的な海産物であるナマコやフカヒレ、真珠などに加えて、新たに換金性の高い商品としてアガルアガルの養殖が新たに開始されたり、ないしその規模が拡大されるといった状況が盛んに見受けられるようになった。

このアガルアガルの用途であるが、サマ人などの間で自家消費されるのは全体の約１割以下であり、基本的には仲買人へ販売され、それが加工業者の手に渡り、そこでカラゲーナンと呼ばれる食品や歯磨き粉などの添加物として使用される成分が抽出され、最終的にはその成分が日本や欧米などを含む世界各地へ輸出され、加工食品などに使用されている状況が調査を通じて確認できた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6 件）
① 床呂郁哉「流動と生成―スールー海域世界の民族誌」2012 年東京大学総合文化研究科博士学位論文、査読有り pp. 1-251。
②「『もの』研究の新展開に向けて」『アジア社会文化研究』2012 年 13 号、査読無し、pp. 81-84。
③床呂郁哉「スールー海域世界から見える複数のグローバリゼーションズ」、三尾裕子・床呂郁哉編『グローバリゼーションズ』2012 年、査読無し、pp. 31-51、弘文堂。
④床呂郁哉・河合香吏編『「もの」の人類学』2011 年、京都大学学術出版会。査読無し。381 ページ。
⑤床呂郁哉「「もの」の御し難さ：真珠養殖をめぐる新たな「ひと／もの」論」床呂郁哉・河合香吏編『「もの」の人類学』2011 年 pp. 71-89、査読無し、京都大学学術出版会。
⑥床呂郁哉 2010 年「プライマリー・グローバリゼーションーもうひとつのグローバリゼーションに関する人類学的試論」『文化人類学』75 巻 1 号、査読有り、pp. 120-135

〔学会発表〕（計　3 件）
①床呂郁哉「『グローバリゼーション』を人類学的に問い直す：スールー海域世界の事例から」
2013 年 3 月 8 日山下晋司教授退職記念シンポジウム（東京大学駒場キャンパス 18 号館ホール）

②床呂郁哉「「グローバル／ローカル」を問い直す：スールー海域世界から見る複数のグローバリゼーション」
（2011 年 11 月 4 日地域研究コンソーシアム・シンポジウム「地域研究のだまし絵」大阪大学豊中キャンパス）

③床呂郁哉「人類学におけるミクロ／マクロ・アプローチ
養殖真珠をめぐる Multi-Sited Fieldwork」
2011 年 7 月 24 日 AA 研基幹研究人類学班公開研究会

６．研究組織
(1)研究代表者
床呂郁哉　　（TOKORO　IKUYA）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：90272476